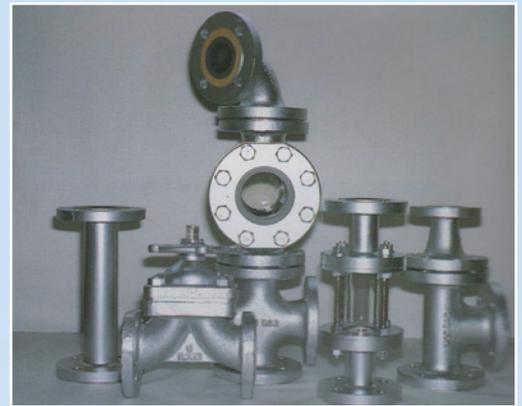




戦後の新製品開発

戦後の交通関連の受注(前項 終戦直後の岩城硝子)により何とか息を吹き返した岩城硝子が次代の新製品とするべく開発に取り組んだのはテレビ用ブラウン管硝子バルブ、建築用硝子ブロック、そして硝子内張鋼管などでした。

建築用ガラスブロックは一般家屋のみならずビルや工場の新建材として将来性が期待されました。この製造技術には成形技術の基本的工程が含まれていた事から、当時のガラス職人はこぞって開発に参加しその腕を磨いていきました。現在でもガラスブロックは様々な形状・用途のものが建材として存在しています。



チーエル®

硝子バルブの開発には、戦時中に手掛けていた電波探知機(電探=レーダー)用ブラウン管硝子や金属熔着ステムに関する技術が大いに役立ちました。戦後の電気・電子、そして光学技術の曙は太平洋戦争中に萌芽したと言われますが、岩城硝子にもまたその種が眠り、そして育ち始めていたのです。

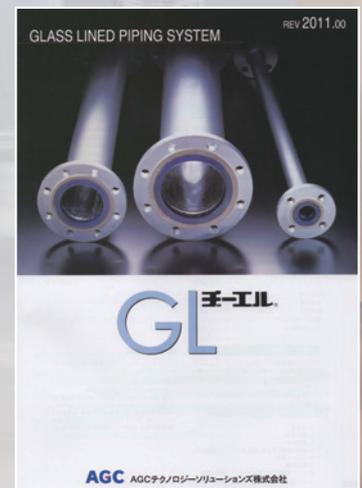
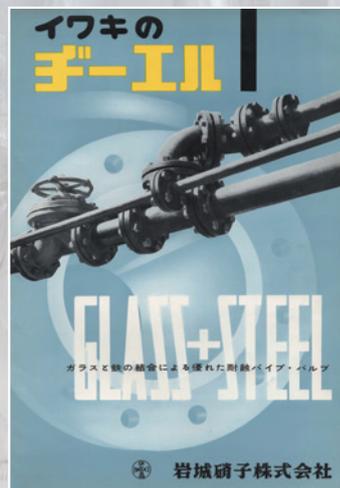
これらの技術を足がかりとして開発に着手、その成果は工業技術院(現・産業技術総合研究所)や商工省(現・経済産業省)に認められ国からの研究助成を得られるようになり、試作品がNHK放送技術研究所にて放送用機材の開発に役立てられ、日本のTV放送黎明期を支える役割を果たしたのです。残念ながらブラウン管テレビは長年にわたる



低融点粉末ガラス(フリット)

その役目を終えましたが、培われた熔着技術や部材はガラス製造の様々な場所で生かされています。

そして世界初の硝子内張鋼管(商品名:チーエル®)は鋼管の腐食に困っていた当時の化学工場技術者の方々に絶賛を持って受け入れられ、さらに改良を加えた製品は現在でも定番商品となっています。



新旧 チーエル®カタログ (提供 AGCテクノロジーソリューションズ株式会社)